



井上道義の 未来だった今より

前回、「自己肯定」と幸福との関係について書きましたが、偶然、最近それを感じる機会があったので、自画自賛でみっともないけれど書きます。

4月18日、東日本大震災でフル編成での活動の場がない仙台フィルとアンサンブル金沢（OEK）との合同の復興支援コンサートが、金沢であった。仙台のメンバーは8時間のバスの旅の後すぐ、OEKも別の午後のコンサートの後すぐ、21時まで。山下一史君指揮で仙台がフィンランディアなどを演奏。僕は金沢と仙台の混成オケでドボルザークの「新世界より」を振った。この曲は彼の故郷チェコへの望郷の思いとアメリカにいる彼自身の自己肯定を音楽的に試みた作品だ。世界中、はいて捨てるほど演奏されている「真の名曲」（名曲とは少々のポロ演奏でも聞くに耐えられるから名曲なのだが）。よせば良いのに忙しい時期にこれをや

る決心をしたOEKともども、今こそ、この名曲の高貴な本質を高次元な演奏で表現できないで、仙台の音楽家はどうするのか？ 僕も今までの経験すべて賭けた。

安永徹さん（25年間ベルリンフィルのコンサートマスターだった）が客席にいた。学生時代も尊敬する下級生だった彼が、コンサートの後、「素晴らしい。一点もセンチメンタルでなく、ドボルザークのメランコリーが満ちあふれていた。実はこの曲はあまり好きでなかったけれど今から好きになった！」。夜中にはもう一度電話をくれた。値千金の言葉だった。何か肯定できた。翌日、両親の墓に5年ぶりに寄ってみる気になった。日本は父の故郷ではないが、霊園の桜がブラボーと叫んでいるように満開だった。

（オーケストラ・アンサンブル）
金沢音楽監督

♪ 続・幸福—肯定